

ドが認められた。2回目、3回目のエピソードである抑うつ状態と幻覚妄想状態については明確な心因は見あたらないが、初めのエピソードである幻覚妄想状態は、転居後に隣人との関係がうまくいかなかったことが誘因として考えられ、患者が神経質な性格であったことから、心因性の妄想反応であった可能性がある。また、遺伝要因は認められないが内因性の精神病である可能性も否定できない。しかし Castleman 病の好発年齢は平均して30歳とされており、本例でも明らかな身体症状や精神症状の発現以前に Castleman 病が既に発病している、これが精神病状態に関与していた可能性が考えられる。特に脳幹病変についてはこれまでもかなり精神症状に関する報告があり、本例の挿間性の精神病状態が直接的に脳幹病変と関連している可能性がある。

Castleman 病が症状精神病を起こす可能性については、Interleukin-6 (IL-6) による可能性を考察した。IL-6 が精神障害を引き起こす明確な証拠は無いが、発熱作用、神経成長因子様作用が確かめられており、多発性硬化症の発病に関係しているという報告がある。また IL-6 と同じサイトカインであるインターフェロンγ、慢性肝炎などの治療薬として投与した際に、中枢神経障害として情動・意欲に関する精神症状を起こすという報告もある。Castleman 病において増加している IL-6 が高粘度症候群をひき起こすとともに、このように症状精神病をもたらす可能性もあるので今後の症例の集積を待って検討していく必要があると考えられる。

8) 神経性過食症の治療中に躁状態を呈した1症例

田中 敏恒・小林 徹 (新潟大学精神科)
中山 温信 (国立療養所 犀潟病院)

はじめに：今回我々は神経性過食症の治療中に躁状態を呈した1例を経験した。本日はその臨床経過を呈示すると共に感情障害に近縁な神経性過食症が存在する可能性について若干の考察を加え報告する。

症例：昭和39年生まれ27歳の女性。現病歴；昭和60年12月(21才)、短大2年生の時、過食、自己誘発性嘔吐、下剤の乱用などが現れほとんど毎日続いていた。そのため平成2年N大学精神科を受診し、神経性過食症と診断され、抗うつ剤による治療が開始された。その後約2週間で過食症は軽快した。しかしその8カ月後には躁状態を呈し精神病院に入院した。lithium carbonate などによる治療により2カ月後に寛解し退院した。しかし退院

後は lithium carbonate は中止されていた。退院直後より過食症は再発し退院後1カ月目から lithium carbonate を再投与し経過をみている。

考察：以上の臨床経過から、摂食障害と気分障害の関係について考察を試みたい。

Pope と Hudson は摂食障害と気分障害の近縁性について次のように総括している。まず気分障害が摂食障害の患者に認められたという報告はかなり多く存在する。摂食障害の症状のため2次的に抑うつ状態を呈したと考えられる症例も見られるが、中には大うつ病が摂食障害に前駆していた症例についての報告も見られる。一方躁状態を呈した症例についての報告も僅かながら報告されている。次に神経性食思不振症の患者は追跡の段階で、食行動の異常がおさまっている時でも抑うつ症状を呈することがあるという報告も見られる。第三に摂食障害患者の家族に感情障害を持つものが多いことが見いだされている。第4に神経性大食症の患者に dexamethasone 抑制試験と thyrotropine releasing hormone 刺激試験を施行すると大うつ病とほぼ同じくらい陽性反応を示すという報告がある。第5に摂食障害患者のうち特に神経性大食症の患者には抗うつ剤が著効するという報告が存在する。以上の5つの根拠から感情障害と摂食障害は近縁関係にある可能性が高いと Pope らは結論している。

本症例は抗うつ剤の投与により約5年間続いた過食症が軽快した。しかし抗うつ剤開始8カ月後には躁状態を呈した。このように神経性大食症の躁転例はそれ程多くは報告されておらず、更なるその臨床経過を詳細に記述した報告は見あたらない。本症例は摂食障害と感情障害が近縁関係にあるという Pope らの報告を支持する貴重な症例と考えられたのでここに報告した。今後症例を積み重ね感情障害に近縁な摂食障害の臨床特徴を明らかにして行きたい。

9) 県内薬物血中濃度コントロールサーベイの現状報告と考察

山口 勇司・三宅 章
齊藤 健利・田宮 崇 (田宮病院)
橋本 博・梶 鎮夫 (国立療養所 寺泊病院)
小野 博昭 (新潟こばり病院)

近年、血中薬物の正確・簡便・迅速な微量分析法が開発され、薬物療法の適正化・個別化を目指した薬物血中濃度モニタリング (TDM) が臨床の場において普及し

ている。特に昭和56年の特定薬剤治療管理料の設定により経済的裏付けができたこともあり、中小病院でも測定が広く行われている。

こうした傾向の中で、測定結果の精度管理について常に配慮する必要性から、新潟県内施設における薬物血中濃度測定の実状を把握し、更に各施設において測定値の正確度の確認を行うため平成元年度より抗てんかん薬の5剤 (PHT, PB, VPA, CBZ, PRM)、第5回からジゴキシリンとテオフィリンを加え、7薬剤のサーベイ (外部精度管理調査) を実施し、各回20余施設の参加を得て、第7回を終了している。この得られたデータを基に、TDM 本来の目的を達成するための精度管理上の具体的方策を検討したので報告する。

臨床上の要望を満たしうる精度の検査データを、医療が要求する諸条件の中で、順調に提供できるように管理することを精度管理といい、施設内で管理血清を用いる内部精度管理と同一試料を各施設に配布してモニターするサーベイに大別される。

その意義については、① 施設間差を知る。② 技術水準を知り、時系列で問題の把握と対策の方向性、さらにその効果を確認する。③ 分析法による差を知る。④ 新たな方法の選択に参考。⑤ 地域的な技術水準の評価が可能。⑥ 知識・技術の共有化ができる。等が上げられる。

ここで最大の問題は薬物測定には標準物質・方法が不明確であり、精密度の評価は可能だが真の正確度の評価が難しい。故に市場占有率=正確度と誤った考え方となっている。その要因は ① 機械試薬メーカーの独自開発、② ユーザーが測定条件を変更。これらが組み合わされ測定値に反映され誤差となる。早期に標準化が望まれる。

医師が TDM を積極的に利用すれば、薬物速度論を用い個別的な投薬計画を作れる。この利用は患者への医療の質の向上のみならず、医療費の節約にもつながる。特に看護には投薬・採血時間の把握と副作用の発見。薬局には薬物速度論や薬物相互作用。検査には精度管理と測定結果の確認。臓器疾患等の臨床検査が上げられる。

各施設の積極的参加を求め、作業の自己分析を行い、医療スタッフ間のネットワークを作ることが今後の大きな目標と考えられる。従って、自己モニター領域の拡張、ネットワークの発展により施設内外・地域の総合的品質管理が成し遂げられることで、TDM 本来の目的が達成されると考えられた。この起爆剤として新潟県内におけるサーベイの実施は意義深いものと考えられる。

10) Rapid Cyclor の甲状腺機能について (第3報)

中村 秀美	(五日町病院)
増沢 菜生・松井 望	
伊藤 陽	(新潟大学精神科)
藤巻 誠	(黒川病院)
若穂 徹	(河渡病院)
砂山 徹	(村上精神病院)
坂井 正晴	(さかい神経科クリニック)
不破野誠一	(国立療養所犀潟病院)
稲月まどか	(新津信愛病院)

今回我々は昨年調査した頻発型躁うつ病患者 (以下 RC と略) を約一年間追跡調査し、病相の switch 時に可能な限り末梢甲状腺ホルモン値を調べ、その変化について検討した。加えて甲状腺自己抗体の有無についても調査した。またカルバマゼピン (以下 CBZ と略) の末梢甲状腺機能におよぼす影響についても検討した。

対象と経過: 対象は昨年調査した女性 RC 患者12名と新たにリストアップされた女性 RC 患者2名の計14名である。内2名は12カ月間寛解状態であり両者とも CBZ 単独投与であった。1名は炭酸リチウムを CBZ に変更後うつ病相のみの rapid cycling になり、9カ月経過していた。1名は36カ月間の炭酸リチウムと CBZ の併用療法で、過去一年間に2回の躁病相が出現したのみであった。全体では CBZ を使用していた6名中4名に CBZ の効果が認められていた。

検査方法: 対象者全員に研究の趣旨をよく説明し検査に対する同意を得、14名中12名の RC 患者の各病相期に可能な範囲で検査を施行した。T₃, T₄, fT₃, fT₄, rT₃ は RIA により測定した。また TSH 基礎値は高感度 TSH-RIA により行った。

結果: 女性 RC 患者の T₃, T₄, fT₃, fT₄, rT₃ および TSH 基礎値はうつ、軽躁、寛解の各病相期により差が認められなかった。また12名の女性 RC 患者全員がサイロイドテスト、マイクロゾームテストともに陰性であった。

今回の調査で女性 RC 患者12名のうち6名が CBZ を使用していたが、この6名の患者について延べ8回の病相で CBZ 血中濃度と末梢甲状腺機能を検査した。その結果 T₃, T₄, fT₃, fT₄, rT₃ 値と CBZ 血中濃度の間に負の相関が認められたが、TSH 基礎値との間には相関は認められなかった。

考察: 以前我々は未治療のうつ病相期にある患者の末梢甲状腺機能を測定し、正常対照者に比し T₄ が有意に高いと報告した。今回の調査では各病相期による差は認められなかったが、この結果の相違は RC という病